

# 天道教の近代化運動 —孫秉熙を中心に—

邊英浩 (都留文科大学)

## I はじめに

韓国での土着的近代思想の代表として、東学、天道教（第3代教祖孫秉熙 [ソン・ビョンヒ 号は義菴〈イアム、의암〉 1861年4月8日～1922年5月19日] が東学を改称）とその思想である「人乃天」があげられることが多い。しかしこの思想は意外に理解困難で、しばしば多くの人から単なる人間中心主義の近代思想と誤解されているようである。孫秉熙は壊滅状態に陥った東学教団を再建し、教育事業と人材養成、学校設立、出版活動などの実力養成運動をすすめ、さらに3・1独立運動を主導したにもかかわらず、現代韓国国内では意外なほど評価が低いようである。3・1独立運動といえば柳寛順（ユ・グワンスン）であり、孫秉熙はその影に隠れている。国父といえば、金九（キム・グ）があげられるが、金九は東学農民戦争に児童接主（リーダー）として参加し、3・1独立運動以後に作られたさまざまな共和政体の亡命政権構想の1つである大韓民国臨時政府の主席となった。だが、孫秉熙は東学・天道教の指導者として3・1独立運動を主導し、3・1独立運動以後のいくつかの共和政体の亡命政府の大統領に推挙されていたが、国父として尊敬されることはない。

東学は崔濟愚（チェ・ジェウ 号は水雲 1824～64年）の神秘的な神との対話である「天人問答」体験から始まる。崔濟愚は零落した両班家に生まれ、父は李退溪（イ・テゲ 名は滉、字は景浩、退溪は号 1501～70年）の学派に連なる人物であった。1860年の天人問答体験以後 64年に処刑されるまで布教した。崔時亨（チェ・シヒョン、1827～1898年、号は海月）が第二代教祖として教典整備、信者拡大などに尽力し大きく成長した。東学思想の核心は「侍天主」であった。侍天主から人乃天への変化は何を意味していたのかを孫秉熙の生涯のなかでみていく。

## II 孫秉熙の生涯

以下孫秉熙の生涯を年表式に整理してみる<sup>1</sup>。

[出生と幼少期]

忠清北道清原郡（現在の清州市）に郷吏（地域官庁の世襲的実務担当者）の家で生まれる。父親は初めの妻が死別したため再婚し、その再婚した母が孫秉熙を生んだ。だが前妻の生んだ長男がいたため庶孽として待遇され、祭事などに参加させられず差別に怒りを抱いた。(1) 両班ではなく中人（郷吏）の出であること、(2) 庶孽待遇を受けたことで、朝鮮王朝の身分差別、その儒教思想に強く反発。これが東学に惹かれる理由であった。

[東学との出会い、入道、その後]

反封建、反外勢（斥倭滅洋）、輔国安民の時期。1882年に甥の誘いで東学に入道し、3年

後に崔時亨と会い、高弟になった。1894年の甲午農民戦争の際は、忠清道に根拠を置いて北接軍を率い、南接軍（全羅道）を率いた全琫準と共に官軍と戦った。官軍の討伐を避けるために元山に身を隠した後は、組職の再建と布教活動に多大な功績を残し、1897年に崔時亨の後を引き継ぎ、第3代教祖になった。

[東学3代教祖、開化派人士との交流、日本への亡命]

1894年の東学農民戦争敗北後、東学教団は朝鮮王朝から徹底的な弾圧を受け、非合法組織化された。また近代化された日本軍隊の威力を体験し、日本の侵略により朝鮮王朝自体が滅亡していく状況にあった。

孫秉熙は開化派の人物達と交流し、開化の必要を痛感する。東学と自身への弾圧が激しくなり、1901年に日本へ亡命した。ここでも呉世昌、権東鎮、朴泳孝、趙義淵等の開化派である元官僚たちと交流し、上海や明治維新以後改革が進んでいた東京などを見て回りながら人材育成の必要性を悟った。このことから、朝鮮の開化を主張するようになり、1903年からは青年達を選抜して、日本に留学させるようになった。亡命中は新聞寄稿などを通じて内政改革論と近代化論を説いた。

[天道教への改称と帰国]

孫秉熙は日露戦争が避けられず、この戦争で日本が勝利すると予測した。そのため日本に協力し、日本勝利後に戦勝国の地位を得ようと努力。日本の軍人との交遊、軍資金提供、軍用の西北鉄道建設に東学信徒を無償で動員するなど。大韓帝国（高宗皇帝）に替わる自らの政権樹立構想。1904年には、朝鮮内にいた東学教団幹部の李容九（イ・ヨング）に指示し、民会（進歩会）を組織した。しかしこの頃親日団体として宋秉畷（ソン・ビョンジュン）たちがつくった一進会が李容九に働きかけ、権力、経済力、色欲で李容九等を取り込むことに成功し、進歩会は一進会と合同した。合同一進会は日本に韓国保護国化を陳情する声明を発表した。この時期日本にいた孫秉熙は李容九を呼び、「保護国がなぜ独立か？」と問いただし、日韓保護条約に断固反対したという。

だがこの時期の、日露戦争での日本への資金提供を含む協力、そして進歩会が親日団体である一進会と合同したことなどが、孫秉熙に対するマイナスイメージを生んでいる。

[天道教への改称理由]

孫秉熙は1905年12月1日東学を「天道教」と改称し、「人乃天」を標語とした。1905年末には、天道教を弾圧した大韓帝国が日本の保護国となったことから、弾圧がやみ帰国した。教団名改称の理由は下記の3つが考えられる。

- 1 親日団体である一進会と差別化すること。
- 2 東学、天道教への朝鮮王朝からの政治弾圧を終わらせる
- 3 近代的な宗教教団へ発展させる。

[東学の分裂]

天道教内部では一進会の宋秉畷、李容九等の親日勢力との反目が激化し、孫秉熙は一進会の人物達を教団から追放した。だが財政的な困難に遭遇。以後、天道教は孫秉熙、一進会系列の李容九らは天道教から追放後「侍天教」を創設。

[3・1独立運動へ]

日本による武断政治の実施と朝鮮側の反発。

1918 ウィルソンの民族自決権構想と、講和条約会議開催。

この時孫秉熙は自身の逮捕を考え、教祖を朴寅浩へ移譲。

1919年には、3・1独立運動を主導した。民族代表33名が署名した『宣言書』を発表。キリスト教代表らに資金提供を含め、支援した。仏教徒は一部のみ参加。武力では独立できないため平和的な独立運動を模索。独立宣言書（崔南善執筆）を朗読した後、民族代表は警察に出頭、逮捕され、孫秉熙は懲役3年の刑を宣告された。病気が重篤になるまで保釈されず、保釈された直後の1922年に逝去。ほぼ獄中死に近い状態であった。

### Ⅲ 儒教の天と人格神

朝鮮王朝は朱子学（性理学）の国家であり異端的な思想に寛大ではなかった。朝鮮王朝の衰退に伴い、いわば強靱な正統思想の解体過程で諸々の思想が出現することになるが、その大きな1つが東学であった。その検討に先立ち、人格神という視点から儒教的、朱子学的天について簡略に整理する<sup>2</sup>。

#### 一 古典儒教

##### （1）法則という形での人格性表現

自然を法則的に捉えようとし、その法則を遵守すれば恵みがもたらされる。天は通常は何も語らないが、法則秩序の遵守を要求するという仕方でも人格的意思を表現していることができる。

「天は何を言うだろうか。何も言わない。だが四時（春夏秋冬）が循環し、百物が生まれる、天は何を言うだろうか、何も言わない。」「天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉。』（『論語』「陽貨」）

人格神の人格神たる所以は「神の理解と愛」といわれる。理解と愛の主体が、非擬人的であっても、そこに人格性をみることが許されよう。こうして天の人格的意思を探ろうとして人間と天との対話は白熱していく。人格性の高まりとは、神と人間との対話可能性の高まりといえる。

##### （2）一般法則を超えた天の意志、人格性

論語の中では法則で捉えられない天の下位のものは「不語怪力乱神」（「怪力乱神を語らない」）と放置される。

論語には法則を超えた天もでてくる。

「孔子が最も期待していた顔淵が30代の若さで夭逝してしまった。孔子は曰われた、『噫（ああ）。天は予（われ）を喪（ほろぼ）してしまった。天は予（われ）を喪（ほろぼ）してしまった』と深く嘆いた。」「顔淵死、子曰、『噫、天喪予、天喪予』」（『論語』「先進」）

そして「天を怨まず」といい、天との対話が断念されることもある。（「天を怨まず、人を

尤（とが）めず、下学して上達する。我を知る者は、其れ天か」「不怨天、不尤人、下学而  
上達、知我者其天乎」『論語』「憲問」)

### (3) 「天譴説」、 「天人相関説」

漢代儒教（董仲舒 どう・ちゅうじょ、紀元前 176 年? - 紀元前 104 年?）では、天が民  
の中で最も靈なる人物を選び出し君主とし、民に仁政を行なわせるが、天は人君を仁愛する  
ゆえに仁君の「失道の敗」に対して天が災異現象を起こして警告を与えるが、それを受け入  
れなければ天命を別の姓の者に下す。（易姓革命）。だが自然災害がおこることが仁愛の政治  
の不在のためであるとは言えない。天の人格的意思を探り、天と人間との対話は、ここで後  
退、中断する。天の人格性は後退する。

## 二 朱子

朱子（名は熹、字は元晦 1130～1201 年）は理の気に対する根源性を現すため、「天地よ  
り先にただ理のみがあった」とまでいう。「理天」と表現してよかろう。

「未だ天地が有ることがなかった先に、畢竟〈ひっきょう〉のところ、ただ理のみであ  
った。この理が有ればこの天地が有る。もしこの理が無ければ、また天地も無い。」（「未  
有天地之先、畢竟也只是理。有此理、便有此天地。若無此理、便亦無天地」『朱子語類』  
卷一）。

朱子は自然観察が孔子、漢代より格段に進んだ時点にいるため、天、自然の法則的把握は  
当然格段に進んでいる。朱子は通常の法則（＝理）通りに自然が運行する場合、「天に心が  
無い」と言い、花が咲くなど法則に従ってはいるが何かが起こる場合に「天には心が有る」  
という表現を用いている。理が天に先行するため法則的な観点からの人格神的性格は高まる。  
しかし通常法則の運行通りとは異なる現象を生じさせる人格神としての天の躍動的な意  
思をみることは難しいようである。天と人間との対話は限定的なようである。

だが朱子は「天理と人欲」を強調するなかで「理天」は「天理」へと逆転し、さらに天人  
相関説にも逆転する。

「臣愚竊以為、此乃天心仁愛陛下之厚、不待政過行失、而先致其警戒之意、以啓聖心、  
盛徳大業、始終純然、無可非間、如商中宗周宣王、因災異而修徳、以致中興也。」（『朱  
子文集』卷十一、九張左、壬午応詔封事）

## 三 李退溪

韓国の李退溪（イ・テゲ 名は滉、字は景浩、退溪は号 1501～70 年）は、「天とは理で  
ある」と言明している。（『天命図』冒頭）。天は理＝法則に先行される（「理天」）のではな  
く、「天は理＝法則」である。李退溪の理は発し、理は動き、理は到るのは周知のことであ  
るが、天が人格的意思により発し、動き、到るともみれる。李退溪の『聖学十図』第 9 図に  
は「対越上帝」と天を畏れる表現が明記されている。

李退溪は朱子学者である限り、天譴説（天人相関説）もでき、人格的性格はここで後退

する。

「(君主に対して) それ故に私、愚かな臣下は思うのでありますが、君の天に対する関係は子の親に対する関係のようであります。親は心で子に怒ることが有れば、子が恐懼修省するのは(親が)怒っていることか、怒っていないこととかを問わずに、事々に誠を尽くして孝を致すのであり、そうすれば親は誠孝を悦んで怒った事が、並(み)な渾然一体と化して痕跡がありません。そうでなくただ一つの事を指定して此のことにだけ恐懼修省し、余の事は旧態依然として恣意のままであれば、それは孝を致すのに誠がなく、偽(いつわ)りて為しているのあります。何を以てか、親の怒りを解きて親の歡ぶこと得られるでしょうか。」「故臣愚以為、君之於天、猶子之於親。親心有怒於子、子之恐懼修省、不問所怒與非怒、事事盡誠而致孝、則親悅於誠孝、而所怒之事、並與之渾化、無痕矣。不然只指定一事、而恐懼修省於此、余事依旧恣意、則不誠於致孝、而偽為之。何以解親怒、而得親歡乎」『退溪全書一』191頁下、卷6、56張)。

李退溪においては朱子に比して、韓国(朝鮮)的な土着の人格神が現れてきているのではなかろうか。李退溪は外来思想で、強靱な体系を持つ朱子学(性理学)的思考の中にあるためか、在来の人格神である天の姿は不明瞭である。李退溪の理学には多くの研究が積み上げられてきたが、天学はこれから深められるべき課題でもある。東学に到り、少なくとも文書化された教典の形で人格神としての天が鮮明に登場してくる。これは韓国(朝鮮)思想史上の事件であったといえる。

#### IV 侍天主と人乃天

漢文では「天」、「天主」、「上帝」等と書くが、以下東学では固有韓国語ハヌルニム(HANULNIM 하늘님ではなく하늘님)を指している。崔濟愚の核心思想は「侍天主」である。崔濟愚は神秘的な天、天主、上帝との対話体験の後に「侍天主」に到ったが、侍天主は人間の内に神靈を有し、外に氣化が有る(内有神靈、外有氣化)と説明され、人間が内面に天主の靈を侍(やしな)っているというものであり、神秘主義的な体験と修行を重視している。崔濟愚は次の

21文字の呪文を繰り返す修行を実践していった。  
至氣今至。願為大降。侍天主。造化定。永世不忘。万事知。

##### ※21文字の呪文解説

「至氣」とは「虚靈蒼蒼として干渉しない事がなく、命じない事がない。しかし、形はあるようでも形状しがたく、聞こえるようでも見ることは難しい。これが渾元の一氣である。」(論学文)つまり至氣とは、自然と世界に遍く充満し、宇宙万物を貫いて止まることなくはたらきつづける根源的エネルギーとしての生命力を意味する。

「天主」とは、感覺的・經驗的世界をはるかに超越した唯一絶対の主宰の人格的呼称であり、究極原理として、これを敬って「主(ニム)」を付したもの。

後半の「侍天主造化定永世不忘万事知」の13字は、本呪文とよばれて東学で特に重んじられ、「呪文13字を誠心誠意唱えれば、万卷詩書もいかんせん」(教訓

歌)とまで説かれているもの。

「侍天主」は「侍(さむらい)天主」でない。絶対権力者のような天主に向かって一方的に「侍(はべる)」「侍(さぶら)う」とか「奉仕する」という意味でもない。崔濟愚は「侍」の字の意味を、「内有神靈。外有氣化。一世之人。各知不移者也。」(「論学文」)と説明している。つまり、一人ひとりの人間の内奥の深層にはたらく神妙な靈氣の効能と外界の天地万物に作用する生生化化の機能、即ち氣化との相関連動を自覚体感すると同時に、同じ世に生きる人々までもそのような境地を知得して精神的迷走がないようになるということである。

※『東経大全』「布徳文」の「天人對話」1860年

1860年4月5日のこと、山中で修行していた崔濟愚は突然寒気をおぼえ、異常な体の震えにおそわれました。……彼は、なんとか家に帰って床についたものの、何の病気なのかは見当もつきませんでした。ところが、何か靈的な氣配を感じたかと思うと、何もない空中から突然不思議な声が聞こえてきました。崔濟愚は驚いて飛び起き、どうにか気を静めてから、おそるおそる「誰ですか」と尋ねました。声の主は答えました。「懼れるな。恐がるな」、「世人はわれを上帝と呼ぶ。そなたは上帝を知らないのか？」

崔濟愚は、その上帝がいったい自分などに何のご用かと訊いてみました。すると声の主は「われはこれまでの間、何ら為すところがなかった。それゆえそなたをこの世に生まれさせ、法を授けて人々を教化させることにした。決して疑ってはならぬ」と答えました。そしてまた「わが心はそなたの心なり。世間の人間にどうしてこれが分かろうか。人には天地のことは分かっても、天地の造化をつかさどる鬼神のことは知らぬ。鬼神とはわれのことなり。汝に無窮の道を授けるゆえ、道を修練し、文章にして人々に教え、上帝の法を正しくおさめて徳を広めるがよい」とも告げました。

崔濟愚は声の主に向かって、「それでは西道(キリスト教)で人々を教化せよということですか？」と質問しましたが、声の主は「ちがう」と否定しました。そして上帝は、自分がこれから授ける靈符で人々の病を救済し、呪文で人々を教化せよと告げ、「さすれば汝もまた長生し、天下に徳をひろめるであろう」と付け加えました。白紙にわが符図を受けよというので、崔濟愚が言われたとおりの紙を広げると、そこにはくっきりとある模様が映っていました。さらに上帝は崔濟愚に、その模様を筆写して焼き、その灰を清浄な器に入れて水に混ぜて飲むよう言いつけました。崔濟愚は、たくさんの靈符を紙に写して毎日その灰を水に混ぜて飲んでみました。すると、何日かすると不思議にも体がほぐれてきて、肌につやが出てきました。しかもこの靈符で病気も治ったので、上帝の言う通り、靈符はまさに仙薬であることがわかった。

孫秉熙が東学を天道教に改称する前後に「覚世真経」(1899年)、「授受明実録」(1899年)、「道訣」(1899年)、「明理伝」(1903年)、「大宗正義」(1905年)、「無体法経」(1910年)などの仏教的な色彩が濃厚な宗教的な主要著作を発表している。崔濟愚、崔時亨が物語りの

わかりやすい教典を残したのとは異なり、孫秉熙の著作は近代的な宗教教団へ発展させるため教理の体系化を試みたためか、大変難解な論理構造を有するものとなっている。「覺世真經」では「侍天主」から「主」が脱落し「人以侍天」とされ、「授受明実録」、「道訣」、「明理伝」では「人は是れ天人である。(人是天人)」という表現が見え、「大宗正義」で「人乃天」という表現が登場している<sup>3</sup>。これらの著作では世界と人間を法則的に説明した内容が多い。

こうして孫秉熙は天道教と改称する前後に人乃天を標語とした。信仰と体験を重視する標語である「侍天主」に比べると、孫秉熙が標語とした「人乃天」は「人間が、すなわち天である」というものであり、ハヌルニム(天主)と人間の関係において人間主体を重視した標語となっている。孫秉熙は人乃天は崔濟愚の教えであるというのであるが、侍天主から人乃天への転換は様々な解釈を生み出している。

その代表的な解釈の一つは侍天主にあった人格的な天主＝上帝観を否定し、自然法則的・理法的天観へ自覚的に止揚し、性理学(朱子学)へ退行したというものである。なによりも天主が天と表記され、法則的世界観が前面にでていたためである。およそこのような評価をする論者は朱子学(性理学)自体を非人格的と評価していることが多い<sup>4</sup>。

また孫秉熙は人乃天を標語化して、人間主体を重視しながら、かつ依然として東学時代の呪文修練なども重視していた。この点に着目して孫秉熙の中に民を変革主体としない愚民観をみようとする主張もされることがある。孫秉熙も修行を求めているため、彼にとって民衆＝天ではなく覚性者だけが天皇氏となり、不覚性者は凡人となるため、変革の主体としての民衆観からはほど遠く、3・1独立運動における33人の民族代表は数少ない変革主体の具体的存在であったという<sup>5</sup>。

今まで述べたように朱子学(性理学)の天を非人格的にとらえること自体に無理があり、理が前面にでていても、それ自体で人格神の否定になるわけではない。ただここでは、侍天主から人乃天という流れが朱子学への退行であったのかというこの点のみをみていきたい。孫秉熙が人乃天といいながら民に修行を求めているため、この一見すると矛盾しているようにみえる孫秉熙の思想を統合的に理解する必要がある<sup>6</sup>。

崔濟愚の場合最初は天主が外にいると考えて、天主との人格的な出会いと問答の体験をしているが、次第に修行の深化に伴って天主が己の内にあると自覚し、後に「吾の心は即わち汝の心」(吾心即汝心)と両者が一つであることが自覚されるに至っている。したがって修行が深まれば、外在的な対象に対する信仰よりは、自然と心に対する主体的な自覚が強調され、ひいては合一を強調することになる。崔時亨も「心は即わち天である」(心即天)、「人は天である」(人是天)と語っている。

孫秉熙はこれについて次のように述べている。

「わが教えは過去には依頼時代であったが故に、天が奇跡・靈跡によって人を導いたが、わが教えは今日では熙和時代であり、例えれば明るい太陽が天から万物を照らしつくすから、小さな雲があっても、真昼には天下が大いに明るいようなものである。わが信徒は、これからはハヌルニム하늘님(天主)と神師(崔濟愚・崔時亨のこと：引用者註)に依頼する心を打破して、自己の内にある自天をみずから信じなさい。もし自天をみず

から信じられず、ただ天主と神師に依頼するばかりでは、事に臨んで自力を得られず、真実の歩みを得られないであろう。自天は侍天主の本体であるから、わが信徒は、ひたすら主体を客体と区別して修練せよ<sup>7)</sup>

孫秉熙は人乃天を語るに際して、この修道者の修養と自覚の段階の程度が深まるにつれて最終的には「心はハヌル天である」と悟り、すすんでは「人がすなわち天 사람이 곧 하늘」ということを悟ることが東学の修道において重要であると考えていた。孫秉熙にとって人乃天が原理であれば、修養での具体的実践指針は「以身換性」であった。以身換性とは心を常に肉身の方に置かず、本来の性霊に置き、性霊が主体となった生活(畚)をせねばならないということである。孫秉熙にとって人乃天は以身換性を意味していたが、修行において大降霊(天主との人格的出会いを体験すること：引用者註)を体験した者たちだけに人乃天、以身換性にすすむように語っていたという。

「孫秉熙は、1912年4月5日から1914年3月25日まで7次に及ぶ牛耳洞の鳳凰閣において全国の大頭目483名を呼び49日修練をさせつつ、主に「以身換性」を強調したが、この時修練をする人々には降霊を侍するようにさせ、大降霊を体験した者たちを個別的に呼びだし、『もはや降霊ができたのであるから以身換性工夫をしなければならない』と語ったという。<sup>8)</sup>

こうしてみると朱子、李退溪たちの天に対する誤解はさておいても、孫秉熙が人格的天主を否定したという理解は東学、天道教の修練を理解しない人たちの誤解であるといえる。また孫秉熙が修練を要求し、修業の結果覚性した者と覚性していない者との序列を設定していることに対して、おそらくは朱子学が、学問と修養により学んで聖人に至ることができると主張することへの退行と、愚民観をみようとする考えについてである。東学では『東経大全』を始めとした東学の經典学習と修練を求め、特に天主との対話(心告、呪文修練など)を重んじている。およそいかなる宗教でも修行や修養を必要としないものはないであろうし、修行や修養の程度によって信者の間に段階の違いが生まれる。ただその相違が身分差別などに結果するようなものとなるかが問われねばならない。朱子学では理が万人に内在するとしても、理の内容は封建的な上下の分を含む五倫(君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友)であった。単に修行の程度により人間に差異があるというだけで民を変革主体と見ない、朱子学(性理学)への退行をみるというのであれば、それは飛躍であろう。東学、天道教では、夫婦の平等を最も強調し(「夫和婦順は吾道の第一の宗旨」『海月法説』17)、両班と良人、賤人までが対等の付き合いをしていたことなどは多く報告されている。両班が商業に従事すればみなから両班とはみなされないという社会状況の中で崔濟愚が行商人(負褌商、褌負商)をした経験を有すること、良人と奴婢の中間的な身分であったモスム(叫合)の崔時亨が第二代教祖となったこと、中人で庶子差別を受けた孫秉熙が東学に惹かれたことなど、どれもが東学が朝鮮王朝の朱子学が肯定した身分差別を否定するものである。この点はより詳細な検討が必要であろうが、東学、天道教での修養の段階を設けていることを、そのまま朱子学への退行、民衆を変革主体とみない愚民観を垣間見るといえるのは飛躍であるといわざるをえない。



## V 結びに代えて

東学・天道教において人乃天はその侍天主の否定を意味するものではなく、朱子学（性理学）への退行を意味するものでもなかった。しかし修道、神秘的体験を持たない者たちにこの標語が伝わっていくとき、人間中心主義哲学とのみ受け止められたり、愚民観の表明と受け止められる可能性は存在している。だがそれは誤解である。孫秉熙の日露戦争前後での日本の戦勝を予測した上での対日協力の経歴がこの誤解を拡大させているのかもしれない。

朱子学における理氣天の関係は、東学においては氣は氣と至氣に分離し、至氣は理の位置にきた。そして至氣は上帝でもあった。人間が心の中で人格神に相對するとき、個人は人格となる。人格は、個人でも人間でもなく、国家構成員（国民、個人、臣民など）を越えた存在である。国家権力が全体（国家）のために個人は犠牲になるように強いる時、人格は国家を越えた視点で国家の命令に對峙できる<sup>9</sup>。人格は良心とも呼び得るが、現代東アジアでは唯一韓国で良心宣言という現象がみられる。これは専らキリスト教の影響と考えられてきているようであるが、東学、天道教の影響をまず第一に考えるべきであろう。東学、天道教の人格神の伝統、これ自体長い韓国の歴史のなかで持続してきた信仰を集中的に表現したものであるが、その上に、キリスト教が韓国で広まり得たのもあろう。こうしてみると国家権力者である大統領さえ民の力で追い落とされる現代韓国の状況をみると、東学、天道教は形を変えつつ再現し続けているとみることもできるであろう。

<sup>1</sup> 金サムン著『義菴孫秉熙評伝 一激動期の經世家』チェリョン社、2017年（김삼웅『의암 손병희 평전 - 격동기의 경세가』채륜, 2017년）

<sup>2</sup> 古典儒教から朱子までは下記を参照。岩間一雄「中国の天について」（『中国—社会と文化』第三号、東大中国学会、1988年）。

<sup>3</sup> 朴孟洙『開闢の夢』モシヌンサラムドウル社、2011年、506頁（朴孟洙『개벽의 꿈』모시는사람들사、2011年、506쪽）

<sup>4</sup> 崔東熙「天道教思想」（『韓国現代文化史大系』高麗大学校民族文化研究所、ソウル、1976年。趙景達『異端の民衆反乱』岩波書店、368頁）

<sup>5</sup> 趙景達『異端の民衆反乱』岩波書店、370頁

<sup>6</sup> 金容暉「韓末東学の天道教改編と人乃天教理化の性格」（『義菴孫秉熙と3・1運動』モシヌンサラムドウル社、2008年）。『의암손병희와 3,1 운동 ; 통섭의 철학과 운동』：모시는사람들、2008년）

<sup>7</sup> 李敦化『天道教創建史』（大東印刷所、京城、昭和8（1933）年）、第3編第10章、72頁

<sup>8</sup> 金容暉「韓末東学の天道教改編と人乃天教理化の性格」104～105頁

<sup>9</sup> 人格の意味については以下を参照。金泰昌「東アジアの共通善は仁・通・和の相関連動態」（荒木勝監修、邊英浩編集『東アジアの共通善』岡山大学出版会、2017年、第3章）